

フランス移民問題の再審 G・ノワリエル『フランスという坩堝』が映し出す未来

フランス移民研究の草分けであるジェラルド・ノワリエル（1950-）の主著『フランスという坩堝——19世紀から20世紀の移民史』（2006）が、2015年秋に法政大学出版局より刊行された。フランス北東部の製鉄業の町ロンウィで移民労働者たちと出会い、これを博士論文の主題に据えたことをきっかけとして、ノワリエルは移民研究を自らのライフワークとしている。フランスにおける移民現象を包括的に論じたこの著作は、1988年の初版以来版を重ね、この分野に足を踏み入れる者にとって不可欠の、現代の古典とも呼ぶべき位置を占めている。本セッションでは大中一彌氏（政治思想）、川崎亜紀子氏（歴史学）、太田悠介（思想史）の三人の訳者が発表を行い、ノワリエルの仕事を足場としてフランスの移民史を振り返り、移民社会の今、さらにはより踏み込んで未来を考えることを目指した。その裏には、2015年1月のシャルリ・エブド襲撃事件という現在時と必然的に結びつかざるをえないフランスの移民問題について、丁寧な議論の場をもうけたいという登壇者に共通の思いがあった。非学会員でありながら、分野の壁をこえて参加を快諾してくださった川崎氏には、あらためてお礼を申し上げたい。

まず、セッションのイントロダクションとして、大中氏が『フランスという坩堝』の全般的な紹介を行った。『思想』掲載論文「移民社会の論じ方——ジェラルド・ノワリエルにおける記憶と歴史」（2015年8月号）を振り返りながら、大中氏は移民をめぐっては19世紀末以来、「起源（origine）」と「契約（contrat）」という両極のあいだで議論が交わされてきたことを強調した。それによれば、起源の極には普仏戦争後から登場する血統や土地を重視するナショナリストの陣営があり、作家モーリス・バレスから身体の特徴に基づく人体測定法を考案したベルティオン父子まで、きわめて広範な知識人層がこれに含まれる。契約の極には社会契約を独自の仕方でも深化しようとするエミール・デュルケームがいた。移民に対して早くから敏感であったのは、実は前者の側であり、「外国人排斥」というかたちで移民問題が初めて顕在化するのである。これに対して、デュルケームの貢献とは、地縁や血縁で結びついた社会から労働の分業が生み出す相互依存を中心とする社会への転換という視点を打ち出し、起源の陣営とは異なる仕方でも社会統合を考えた点にあった。大中氏はノワリエルの仕事がこのデュルケームの系譜に連なるものであり、そこから労働を媒介として多様な移民集団が統合されてゆく動的な過程を描くという『フランスという坩堝』の基本的な視座が出てきたと指摘した。

フランスには19世紀末から世紀転換期、1920-30年代、1960-70年代という三つの移民到着の波が存在する。ノワリエルはこれを、好景気による労働力不足を移民労働者によって補わなければならないという、中期的な景気循環のメカニズムと結びつけて

説明する。こうした手法は、特定の文化や宗教を理由として移民は統合不可能であるという主張を相当程度まで相対化することにつながる。というのも、政治的な権利をもたない移民が真っ先に首切りの対象となり、福祉に依存する余剰人口としてクローズアップされるのは、まさしく景気の後退期であり、その意味では文化や宗教は説明のための要因ではありえず、むしろこうした語り方自体がこの時期に特有の現象だからである。とりわけ 2005 年の郊外暴動以降、こうした言説が力をもちつつあるだけに、ノワリエルの手法はなおさら意義があるように思われる。大中氏はこのようにまとめたうえで、1970 年代初頭のオイル・ショック期から経済低迷が続き、移民をフランス社会に受け入れるための基盤であった労働が不安定化した今日にあっても、『フランスという坩堝』の視座が依然として有効であるのかは、開かれた問いであるとして、発表を終えた。

次に、太田が「共同体への情念——G・ノワリエルと移民の後裔たち」と題する発表を行った。本発表は大中氏が発表の最後に提起した 1970 年代以降の移民を直接に論じた。アルジェリアとモロッコを中心とするマグレブ諸国出身の移民である。彼らをめぐっては、「共同体主義 (communautarisme)」の危険がこの時期から言われ始める。移民たちが出自集団ごとにまとまるために、市民が個人として単一不可分の国家の成員となるという共和制の国是を脅かすとされるのである。共同体主義によってフランスが解体するかもしれないという恐れは、欧米とイスラームは共存できないというハンチントン流の文明の衝突論に上書きされることによって、以前からこのような主張を繰り返してきた極右陣営だけにととまらず、より広範に浸透しつつある。

しかし、共同体主義批判においては、移民を文化や宗教によって本質化して捉える結果、移民集団内部の差異がしばしば見過ごされる。本発表では第一世代と第二世代の相違に焦点を当て、第二世代に特有の経験を「共同体への情念 (passion à la communauté)」という観点から考察した。第二世代と第一世代は、第二世代の祖国がフランスであるという決定的な違いによって分かれる。第一世代は母国を離れてフランスにたどり着くために、その祖国はかつての出身国である。それに対して、第二世代はフランスで生まれるか、幼くしてフランスに渡り初等教育を受けるがゆえに、親世代の出身国とは切り離される。そこから出身国とフランスのはざまで揺れ、時には両極のあいだで引き裂かれるという第二世代固有の経験が生じる。一方にはフランス共同体へと向かう情念がある。それは出自に対する恥の感覚、両親の拒絶をしばしば伴う。他方には出自共同体へと向かう情念があり、ルーツの肯定がこれに対応する。

このように、第二世代の内面には、フランスと出自集団という両極へと向かうふたつの「共同体への情念」のあいだの揺れが存在する。共同体主義批判の問題は、移民集団を本質主義的に理解することによって、この揺れが見えなくなることにある。1989 年にスカーフをつけた女生徒が公立学校から追放されるという事件がパリ郊外クレイユで起こるが、スカーフを身につけたというただそれだけの理由で少女にイスラームの脅威が透視されるとき、見逃されたのはまさに彼女の内面の葛藤である。移民集団を一枚

岩と見なしてしまうことで、移民をかえって出自共同体へと向かう情念へと一面的に回路づけてしまう危険すらある。太田は移民に向けられる共同体主義の陥穽をこのように指摘し、移民第二世代が体現する差異を含んだ共同体としてのフランスを肯定できるかどうかという点に、フランスの未来がかかっていると示唆した。

続いて、川崎氏が『フランスという坩堝』におけるユダヤ系移民をめぐって」という題目で発表した。近代フランス史・ユダヤ史を専門とする川崎氏は、『フランスという坩堝』の方法論的な前提を問うことから考察を展開した。ノワリエルはフランスにおける移民をまず総体として概括し、その後スペイン移民、ロシア移民、イタリア移民、アルジェリア移民といった国籍ごとに分けられた移民集団を分析する。これは各移民集団に共通する経験を取り出そうとする意図があるためである。太田が検討した第二世代のように、この手法が特定の主題に関して有効であることはたしかである。しかし、国籍を単位として移民集団を捉える手法に問題がないわけではない。というのも、ユダヤ人はまさしく国籍集団ではないからである。その結果、『フランスという坩堝』のユダヤ系移民に関する言及は、必然的に曖昧とならざるをえない。一方では他の外国からの移民と並列され、国籍集団と同義に扱われる。他方では反ユダヤ主義についての言及があり、ユダヤ人特有の背景が示唆される。移民であることが問題なのか、あるいはユダヤ人であることが問題なのかが判然としないのである。

ノワリエルの方法に内在するこのような課題を踏まえたうえで、川崎氏はユダヤ系移民の移動を詳細にたどり直した。主な流入の波として、1871年から72年の国内移住（1871年の普仏戦争敗北とアルザス・ロレーヌ地方割譲の結果、都市部に移住）、19世紀末から第二次世界大戦にかけてのフランス国外からの移住（1905年のロシア革命を逃れて移住）、そして、第二次大戦後の北アフリカからの移住（1950年代から1960年代のマグレブ諸国独立が引き起こした移住）を指摘した。ノワリエルの叙述において後景に退いている歴史的事実を確認することで、川崎氏は第二次大戦後のユダヤ系移民をめぐり状況の重層性を明らかにした。多岐にわたる論点をすべて挙げることはできないが、ユダヤ系移民内部でのアシュケナズィ系とスファラディ系の対立、マグレブ地域から移住したムスリムとの関係、イスラエル国家との関係が言及された。とりわけホロコーストをめぐり論争と中東戦争にしるしづけられた戦後のあらたな状況が、フランス国内のユダヤ系移民を他の移民集団とは異なる仕方でも可視化してゆくという指摘からは、フランス国内で労働を媒介とした社会化の契機が失われる一方で文化や宗教を軸とする出自が主張されるとする大中発表、さらには、スカーフ事件の際に共和制の理念の名のもとにスカーフ着用に対して反対したユダヤ系知識人の存在に触れた太田発表との、興味深い論点の交差が見られた。

以上の三人の発表に対して、かねてからノワリエルの仕事に関心を寄せてきた鶴飼哲氏がコメントを加えた。該博に裏打ちされた多くのコメントがなされたが、紙幅の都合上、ここではその概要を示すことにとどめたい。鶴飼氏によれば、題名にある「creuset

（坩堝）」の語は、「melting pot」の仏訳であり、この語にはフランスもまたアメリカと同様に移民国家であるというノワリエルの主張が込められている。フランス共和制の礎である人権宣言の個人主義の原則が、移民社会の現実を隠す建前として働くことを指摘するという意味で、当時の文脈では先見の明があった。しかし、多文化に彩られた移民社会フランスという幸福なヴィジョンは、極右陣営が多文化主義の主張を流用することによって、行き詰まることになったという。マイノリティの差異の称揚に代わって、移民の文化の異質性を口実として彼らを統合することの不可能性がマジョリティの側から主張されるようになったのである。それは、1984年創設のSOSラシズムに代表される反レイシズム運動が対応できない時代の始まりであった。こうした流れのなかで、たとえばアラン・フィンケルクロートのような人物によって、エルネスト・ルナンの『国民とは何か』が再評価される。「日々の人民投票」という言葉が示すように、ルナンの国民像は主意主義的な点に特徴があるが、それは過去を忘れよという主張の裏返しでもあった。この過去の忘却がもたら移民に対して求められるとき、彼らがいつまでも過去にこだわりすぎるといふ苛立ちがマジョリティの側に生まれるのは、もはや必然である。ノワリエルは19世紀から続く長い移民史を描くことで、移民社会フランスの現実を肯定しようとしたが、『フランスという坩堝』はこのような政治と歴史が分かちがたく結びついた80年代の磁場に差し出された著作であった。鵜飼氏は初版が刊行された当時、フランスに留学していたという個人的な経験を織り交ぜながら、この著作が置かれていた状況を、以上のような仕方で豊かに再現した。同氏によるこの見取り図は、移民史と不可分であるはずのフランス史を一種の「自虐史観」とみなし、国民アイデンティティの正常化を求めたニコラ・サルコジ前政権に端的に見受けられるような立場を理解するうえでも、示唆に富むものであった。世話人による時間配分がうまくゆかず、短時間でのコメントをお願いすることになってしまったことが惜しまれる。この場をお借りして、鵜飼氏には深くお詫び申し上げたい。

学会初日の早い時間帯にセッションが割り当てられたという事情もあり、参加者は15人程度であった。移民集団内部の階層性、また、「共同体主義」の語をめぐるフランスとアメリカの議論の相違について質問があった。第一の質問に対しては、世代間の差と同時に知識人層と民衆層の分化が見受けられるという点、第二の質問には、アメリカでは「コミュニタリズム」と経済的リベラリズムが対立する一方で、フランスでは「共同体主義」は共和主義と対置されるという対立軸のずれがあるという応答がなされた。参加者の数は控えめであったものの、発表の内容を踏まえた的確な質問が出され、議論は静かに熱を帯びたように思う。参加者には心からのお礼を申し上げる。